
外伝 僕の身体を捧ぐのは君

TARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外伝 僕の身体を捧ぐのは君

【Nコード】

N2662U

【作者名】

TARO

【あらすじ】

本編・僕の身体は妹に捧げる、の外伝となっています。舞台は赤坂兄妹が学園にやってくる十一年前。

始まりは、ボーイミーツガール。

第零話 世界の始まり（前書き）

CAUTION!! 外伝と本編、どちらから読んでも大丈夫な仕様になっていきますが…。

本編における伏線や用語などもここで補完されていきます。性質上本編より更新は遅めです。

第零話 世界の始まり

これは、とある兄妹が主人公となる少し前の話である。

これは、日本という国が二つの名家に牛耳られる以前の話である。

これは、少年少女の小さな出会い。

しかしこれこそが、後の世の始まりとなることを知る者はまだいない。

世界は、戦争と言う暗い破壊者を内に飼っていた。

二度の大戦を経験した世界は、もう繰り返したりはしないと宣言したにも関わらず。

表向きは、平穩。仮初の平和。

かつて著名な作家は「平和とは争いにおける小休止であり、争いこそが世界の本質である」と述べた。

判ってはいるのだろう。

誰もがその破壊者を隠していることは。

けれども、それを表には出さない。

内なる破壊者に脅えつつも、世界は仮初の平穩にまどろむのである。

日本。

かつての歴史の流れを汲み、天皇を象徴とする国家である。

天皇家と密接なつながりを持ち、行政府にも幅を利かせているのが旧家・赤坂家。

実質的な国のトップであった。

二度の大戦後、各国は自国内の経済活動を著しく損なってしまった。

内需を満たすため、各国行政は貿易と言う名の複数国家間の経済活動を著しく制限した。

その実態はさながら「鎖国」であった。

二度の大戦からたった三年でこの鎖国状態は終わりを告げる。地域間の統合である。

いわゆるヨーロッパ諸国&アフリカ諸国で構成されるE A U。

南北に細長い南北アメリカ大陸で構成された超米。

そして、アジア諸国で構成されたA F Y F。

そして日本。

日本が何処とも結びつかなかったのはこの国が持つ独自の文化性も一因であるが、何より通貨単位Y e nを残そうとした財務官僚たちの最期の責務とも言えるのか。

閑話休題。

これを含め紆余曲折を経ながらも世界は立ち直っていくのである。そして、物語は大戦が終わって四年後から始まるのである。

第零話 世界の始まり（後書き）

ついに補完が始まりました…。

およそ本編の半分のスピードで書き上げていきます。

第一話 少年と少女（前書き）

本編の伏線回収の為にやっています

第一話 少年と少女

「暑い…」

アスファルトでコーティングされた地面に降り立った一人の少年。彼がいるのは滑走路である。

かつてもたらされた条約によって日本の領土が太平洋の島付近まで迫ったのは昔の話。

今日において旧日本の領土は中立地帯と化していた。

決して日本が負けたわけではない。

時の首相（名前は忘れた）が戦後の国連会議において

「新領土の整備をするのは面倒だから領土放棄する」

という名言は戦争が終わって数年経過している今でも誰もが知っている言葉である。

その模様は中継され、各国の代表がこぞって口を大きく空けてマヌケな顔をしていたのは笑ったが。

閑話休題。

そんなこんなでここ、人工大地（有体に言えばメガフロートなのが自然のものでなければ領土とは認められない）に巨大な研究施設を建てようじゃないかと決めたのも時の政府。

もちろんそこで働くための研究者育成の学園も建てた。

民間企業がこぞって出資して今に至る。

「まったく…誰に説明してるんだか」

そう言っ取りあえず歩き始めた。

行き先は寮という奴だ。

その時だった、南太平洋にそぐわない無機質な警告音が流れたのは。「CAUTION! CAUTION! 航空機が滑走路に進入します! 滑走路内にいる人間は直ちに退避して下さい」

一瞬空に光点が見えたためそこを注視してみる。

いた。戦闘機だ。戦闘機!?

滑走路に戦闘機進入 + 滑走路にいる俺!! 死

緻密? な文字式を組み立てた少年は結果を回避するために走った。

戦闘機が通り過ぎるのと少年が草むらに飛び込んだのは同時だった。

何とまああれだけの速度で制動距離がここまで短いとは。

この滑走路は通常の空港の半分くらいの長さしかないと聞いたことがある。

もちろん必要がないからだ。

「わざわざ戦闘機でやってくるなんてどんなじゃじゃ馬でしょうかね」と

気を取り直して少年は戦闘機がスポットインしたところに走っていった。

そこで見た光景は少年の想像を大きく超えるものだった。

飛行機から降り立ったのはお嬢様でしたとき。ってオイ。

空気にツッコミを入れて改めて少女を見る。

可愛い。

透き通った蒼い瞳。太陽の光を浴びて更に輝きを増している明るさ

満点のロングブロンドの髪。

それでいて半袖を着ているんだからアクティブなんだか深窓の令嬢なんだかよくわからない。

ふと少女と目が会った。

少女は首を傾げた。

「やべえ…超可愛いんですけど」

周りにいた体格の良いサングラスのおじさんたちに囲まれる、アレ？

「待って、皆。日本の褒め言葉なのよ」

タラップを駆け下りてくる。うん、やはり彼女はアクティブなようです。

「すみません、従者が粗相をしましたね。私の名前は、クリスティナ＝H＝アルフォードです」

畏まれたので恐縮。

「ああえっと、俺…いや僕は赤坂陽一です」

一応挨拶。うん？アルフォード？

「あの…アルフォードって？」

「ええ、父はハワード＝H＝アルフォード、アルフォード社の現社長です」

何でもないことのように告げられた。

いや、重要案件である。

陽一の中を複雑な思考バイパスが駆け巡った。

アルフォード社といえば世界最大の軍需産業。最近では様々な業種に手を伸ばして総合商社とも言われているが…まさか一人娘がここまで可愛いとは。

いやいや可愛いとかまだそういうことを気にしているのか。

さほど複雑な思考バイパスではなかったようだ。

アルフォード社はこのメガフロートにおいても多大な資金を提供している。

だから学園の名前がアルフォード研究大学となっているのだが。

「赤坂：陽一様ですか…」

クリステイナは暫し黙考していた。

「どうしたの？アルフォードさん」

気になったので尋ねてみる。

するとクリステイナははにかんだ笑顔を向けた。

「クリス、でいいですよ？親しい方たちは皆そう呼んでいますし」

「了解した。で、クリスは何を考えていたのかな」

「えっとですね…」

どこかたどたどしく言葉を続ける。

「陽一の陽ってハルって読めますよね」

コケた。盛大にこけた。えらく思案顔だったからさぞ複雑なことを考えていると思っていたのにそんなことを考えていたのかこのお嬢様は。

コケた陽一を不思議そうに見るクリス。

「ああ、そうだよ。ハルと読める」

ヒマワリの様な笑顔が陽一を照らした。

「じゃあ、これからはハルって呼びますね！」

「あ…かまわないよ」

「それじゃあハル？行きましょう！」

「行くって何処に…！」

「決まってるじゃないですか。寮ですよ寮」

ポカンとしている陽一の顔を見てクリスは勘違いした。

「え…え…もしかしてハルは学生じゃなくて研究員なんですか？」

こころなしか目に涙が浮かんでいた。

陽一の心臓が警鐘を鳴らす。

「待て、ここで泣かれたら俺の命が危ない」

「ひう…ひぐつ…」

「学生だよ！俺も！さあ行こう！」

陽一言葉を聞いてクリスは涙を拭いた。

「よかった」。折角出来たお友達が学生じゃなかったなんていう展開は最悪でしたから」

第一話 少年と少女（後書き）

まあ基本こんな感じ…でもない。

シリアス展開まっしぐらでもないけど。

第二話 お嬢様 お姫様

二人が連れ立って歩いていく。
道は完全にアスファルトである。勿論人工大地^{×ガフロート}上なので当然のことではあるのだが。

設備の特異性から分かるように道が広い。

地平線の彼方は見えないが、それでも大概のものは見える。

何より太陽光線の地上からの照り返しがキツイ。

「誰だよ全く…暑さ対策とかすればいいのに…」

陽一はそう思いつつ隣を歩く彼女を見る。すると視線に気が付いたのか彼女　クリス　と目が合った。

「どうかしました、ハル？」

「いや、暑くないかと思ってさ」

「いいえ、私が着用しているこのドレスは中に簡易軽量クーラーを搭載しているのですよ？」

それは羨ましすぎるだろう。

「ハルも欲しいですか？」

「うーん、考えておくよ。売ってるのかい？」

するとクリスは何処から取り出したのか電卓を片手にキーを叩き始めた。

「洋服の繊維は一応ポリエステルで、クーラーは太陽パネルで……」

もう悲惨なことになりそうなので計算は結構です…という間も無く計算結果を提示された。

「えっと…? 1.0 x 10^9 \$?」

ついつい有効数字で求めてしまったじゃないか。しかもドルかよ。

「ドルなのは当たり前です。世界通貨ですよ? まあ日本円は未だに価値は高いですね」

そうなのだ。今や生粋の経済大国と再び成り上がった日本は為替レートが1ドル＝50円なんていうありえない状況に瀕している。結果、産業は完璧に空洞化。今や国内で活動している企業家はいないだろう。

だがしかし、輸入産業は異常に儲かる。

「昔前は国際通貨機関だったか？が安定化を目論んだが上から七番目くらいまでの候補が軒並み女性関係のスキヤンダルで落っこちて信用ゼロになってしまっただけからは音沙汰が無い。解散したらしいが。」

閑話休題。

そして、そんなクリスと陽一の後ろを壁のように歩いてくるのがいかにもな見た目で周りを圧倒するボディガードの皆さんだ。

クリスに聞いたところによると何でもムエタイの最強の伝道師だとか眉唾物な肩書きを持つ方もいるようだ。だがそれにしてもオーラが…。「俺がこの状態じゃなかったら逃げ出してるな…」

「ぼそつと呟いた陽一の言葉を聞いたクリスは苦笑いを浮かべて言った。」

「でもですよ、この前新しく入られた超能力者と仰る方は凄かったですよ？」

自分の身体にニコニコしながら真剣を身体に刺し込んでいましたから」

「それはただの危険人物だ」

「最も、ただの危険人物ではないかもしれないが。」

30分くらい歩くと目的地である寮らしき建物が見えてきた。

クリスが後ろを振り返って言う。

「皆さまん！今日の護衛お疲れ様です。もう今日は外出しないので結構ですよ」

その言葉を聞いたガードさんは一斉に無線機を取り出した。だからどこからだよ、というツッコミはもう入れない。

やがて何処からともなく現れた数機のヘリコプターから降ろされたロープを昇っていく。

「いや、降りてもらえよ！別に降りられないスペースじゃないだろ！」

するとガードさんたちは陽一のほうを向いて白く光る歯を見せた。そしてそのまま飛び去っていった。

「何なんだあれは……」

呆然とする陽一の横でクリスが告げた。

「護衛ですよ？」

いや、分かっていますけどね。

寮にチェックインを済ませた陽一はクリスと共にラウンジにいた。

「ここは何処かのホテルか？」

「海外からVIPを招いたりしますからね……陽一もそうなのでしょぅ？」

その純粋な瞳を向けられた陽一は目を逸らした。

「いや……俺は別に……」

クリスは周りを見回すとソファに座った。

「ねぇ、ハル？私、コーヒーが飲みたいんだけど」

さて、何処のどなたでしょうか。

「ハル……？」

陽一のことをこう呼ぶのは現時点でただ一人。

「クリスサン？あなたって人はそういう人ですか……」

クリスは妖艶な笑みを浮かべた。

陽一は悟った。ああ、これは間違はなく被り物をする人だと。

「アハハハハ…だって護衛がいると迂闊な事出来ないじゃない？

だから猫を被るのが常套手段なのよ」

「そうか…じゃあさっきの泣きっぷりも真似だったと言っことか…」

「さっきのつて？」

「クリスが俺が学生じゃないのかって問い質した時の奴」

「……………」

固まった。

「もしかして…素？」

クリスが頬を赤らめた。

「ばっ、馬鹿にしないでよ！？そんなわけ無いじゃない」

反応が面白いので陽一はからかう事にした。

「そうか…クラスメートに教えてやるうと思っただけどな」

クリスの顔はもはや赤を通り越して黒くなっている。

「そう…そうなのね…？陽一の部屋に間諜を送り込むわ」

「それは勘弁してください、クリスサン」

陽一はソファから立ち上がってクリスの前で土下座をした。

「お〜ジャパニーズ土下座ね！許してあげるわ」

もちろん今時そんなあほな冠詞はついていない。

何故ならばここで陽一とクリスが話しているのは日本語ではなく英語だからだ。

気を取り直して再び陽一はソファに座った。

「それにしてもクリスがね…第一印象は完全にお姫様だったのにな」

「残念でした。お嬢様とお姫様は常に等しいわけではないのよ？

ちなみにこのドレスも下のスカート部分は着脱可能よ」

「それを俺に見せた理由は？」

「どうせクラスの人たちは私をお姫様として扱っただろうし、ストレスの処理場にするためね。」

何たって私はアルフォードの娘なんだから…」

そこまで言っただけでクリスは表情を曇らせた。

空気を払拭したのはアナウンスだった。

「滑走路に着陸する機体がありますので、滑走路内に進入しないでください！」

「このラウンジで放送しても意味が無いだろうに…」

そう言っただけで滑走路のほうに目を向けると確かに飛行物体が着陸態勢にあった。

しかしあれは…？

隣に来たクリスも首をかしげている。

「ねえハル？あれって…スペースシャトルよね？」

昔地球とISSを往還していた宇宙船の先駆けであるスペースシャトルそのものだった。

「最後の機体が退役してから確かオークションに掛けられて、好事家に落札されたんだっただけか」

「ということは、あれはアームストロング家の坊ちゃんね」

「まあ順当なところに渡ったとも言えるのか…。」

しかし、スペースシャトル単体で飛行は出来るのか？」

「やや滑空に近いものがあると思うのだけれど。どうせ弾道飛行でもしたんでしょう」

そっちな…とうなずきつつ陽一は再びスペースシャトルを見た。

西日に照らされたスペースシャトルは、美しかった。

第二話 お嬢様 お姫様（後書き）

割と早めに更新入れました。

登場人物はまだまだ来る予定ではありません。
多いな。

第三話 突然の来客（前書き）

ゆったり更新中。

第三話 突然の来客

陽一が寮に来てから一週間が経過した。

まだ招集をかけている生徒が集まらず、学校は未だ活動を始めていない。

事実上の夏季休暇である。

この人工大地の地理上の位置が赤道付近であることも一因であるのかもしれないが、何分外が暑い。

照りつける太陽と、アスファルトから上がってくる熱によって発生する陽炎。

これが、陽一たちの活動範囲を大幅に狭める結果となっているのである。

この炎天下の中外出することは死と同意であるが故に寮生活を始めている学生は冷房の効いた快適な空間に留まっている。

「暑い…」

幾度となく同じことを呟いている陽一がいるのは寮の外である。

「ちよつとおハル？ちゃんと探してよ！」

それを見ながら指示をしているのは寮内の窓際にいるクリス。

「どうしてこうなっちまったんだ…」

陽一は空を仰いで呻いた。

話は数分ほど前に遡る。

その日陽一は自室にいた。

クリスが来室するのも日常茶飯事となっていたのでそのイベントを何時も通りにこなそうとしただけなのである。

しかし、陽一は捻りを加えた。

曰く、いつもと同じではつまらないだろう。と。

部屋に入ってくるクリスを驚かせようとしたのである。

その結果

「そつちじゃないって！もう少し右のほう」

「見つからねーよ！クリスも探しに来いよ」

「ハルのせいだ今に至ってんじゃないのよ。どうして私が探さなければならぬの？」

彼女は手に持っていたイヤリングを偶々開いていた窓から落としてしまったのである。

「イヤリングを手に持ってくるのか馬鹿か…？」

「言うに事欠いて人を馬鹿呼ばわりするとはいい度胸じゃない…」

クリスからの蚊を撃ち落せそうなくらいの鋭い視線を背中に受けた陽一は速やかに作業を再開した。

数分後…

「ごめん、あった」

見つかったのは部屋の中。

見つけたのはクリス。

窓の外に飛んでいったと勘違いしただけらしい。

「でもハルが人を驚かせようとするのが悪いのよ!」

陽一はもう何も言わない。

何を言っても火に油を注ぐだけであると判断したからである。

「大体ね、貴方って人は

」

そんなに長いこと交流しているわけでもないのに何でそんな旧友が使うような言葉が出てくるんだ?とも思ったが言わぬが花と判断した。

来客があったのはその日の夜だった。

土地内滑走路の許可が出されているのは午後六時まで。

その轟音が辺りに響いたのは午後十一時。

陽一があてがわれている寮の部屋は滑走路が丸見えの見晴らしのいい場所だった。

それ故音の原因が飛行物体によるものと判断できたのだが。

「一体何処のお嬢様だ?」

滑走路の使用時間が定められているのは周辺住民からの苦情に対する判断である。

土地の特殊性故に周辺は南太平洋諸国との国境線が引かれている。

この土地自体は諸外国不干渉地域となつてゐるため直接の影響はないが、そこに向かつてくる航空機は例外である。研究機関や軍事機関も詰めてゐるため戦闘機が離着陸を行うことは日常の一風景である。

いくらこの状況において戦闘行為は起こらないとは思つていても諸国からすれば国の上空を他国の戦闘機が往来するのは精神的に認めがたいものがあるのだ。

特に夜間に至つては空爆の虞もないわけではない。

そういつた政治的判断も兼ねた結果が夜間滑走路使用規制である。

滑走路から降りてきた人物はそのまま車に乗つて寮のほうへ向かつてくる。

「まあ特に気にすることもないだろーな。寝よ寝よ…」

陽一はそう言つてまどろみに包まれていつた。

翌朝。

誰かに起こされたような気がして陽一は目を開けた。ぼやけた視界に入つたのは黒髪の少女。

段々と焦点が合つていき

「早紀？」

「ええお兄様。お早うございます」

陽一の妹だった。

第三話 突然の来客（後書き）

かなり短めです。ね。今回の話。

第四話 優秀な妹（前書き）

更新間隔バラバラ…申し訳ないです

第四話 優秀な妹

赤坂早紀。

彼女は優秀な妹である。

「早紀ほど素晴らしい妹は居ない」と豪語するのは兄の赤坂陽一。

朝。

「お早うございますお兄様」

「お、おはよう……」

兄妹の朝はここから始まる。

「お兄様？朝食の準備が出来ておりますので階下へ降りてきてくださいね」

「わかったー」

そうは言っても惰眠を貪りたい年頃の陽一は再びベッドへダイブ。

すかさず早紀がやってきて、

「お兄様、私が作った朝食はいらないと仰るのですか？」

そんな事を言いながら目を潤ませて上目遣いで陽一を見るものだから陽一も渋々ながら起きる。

「はい、お兄様口をお開けになつてください」

「あーん」

早紀が陽一に朝食を食べさせるのもいつもの事。

周りに居た給仕たちを尻目に躊躇うことなく次々と皿にある物を平らげさせていく。

「美味しいですか？」

「うん、美味しいよ」

余り表情を変えることのない早紀は兄と会話しているときだけ笑顔になる。

今も、陽一が咀嚼しているのをじっと見つめながらニコニコしている。

とてつもなく平穏な朝の光景である。

昼時。

「お兄様、ブレイクタイムです」

そういつて早紀が飲み物などを載せた台車を押してくる。

勉強中だった陽一はその手を止め、寛いだ。

「差し支えなければお兄様：勉強を教えてくださいだきたいのですが」

「ん、構わないよ。どこが分からないんだい？」

ブレイクタイムは専ら早紀への家庭教師の時間となることが多いのである。

夕食を終え、風呂に入って安らぎの時。

「お兄様？失礼いたします」

ガラガラと戸をあけて入ってくるのは身体にタオルを巻きつけた早紀。

「お背中を流しますね」

陽一が止める前にさっさと始めてしまう早紀。

陽一はされるがままになってしまふのだった。

他の家と違うのは、早紀は絶対に陽一には体を洗わせないことにある。

早紀は陽一の背中を流し終えると何事もなかったかのように風呂場から退出するのである。

そして夜。

自室に入った陽一を待ち受けているのは早紀だった。

服を着替えてネグリジエになった早紀は陽一のベッドで眠りについていた。

いつもの事だと割り切る陽一も陽一であったが、特に気にせずその隣に潜り込んだ。

これが彼らの日常であり、二年前までの日常であった。

第四話 優秀な妹（後書き）

外伝ですから割と短くなります。

第五話 始まった新たな生活（前書き）

ゆったり更新

第五話 始まった新たな生活

「というわけで私がここに」

「いや、全然何も説明してないからな」

「そうですね。では…」

朝食の席で早紀は話し始めた。

陽一 の消息が赤坂本家に知られた事。

陽一 のお目付け役として早紀が派遣されたこと e t c . . .

「物好きだね〜あの爺様たちも」

陽一 は赤坂本家の血筋を引く次期当主予定であったのだが、幼心に
見られる反抗心により勘当。

二年前の事である。

陽一 はそれ以後一人暮らしをしたり親戚を巡り巡って今日に至る。

「どうしてお兄様はここに？」

不思議そうに訊ねる早紀。

「どうして…？何だか面白そうだったし」

「成程」

早紀は陽一の言葉に納得した。

昔から陽一は怖い物見たさ、というか好奇心旺盛であった。かの偉大な発明家の幼少期のような真似事を行っていた事もある。

それ故、その回答には疑問は抱かなかった。

「あら、ハルじゃない。早いよね」

兄妹が会話しているところにやって来たのはクリスだった。

「ああ、クリス。お早う」

陽一が返した言葉をスルーしたクリスはじつと早紀を見つめている。

ややその視線は睨んでいる、とも言えなくも無かった。

「何か？」

早紀が尋ねる。

「あなた…お兄様の何ですか？」

視線から迫力が消えた。

「え、えっ…何って…友達？」

「多分」

突然話を振られた陽一だったが、そこは冷静に対処する。

改めて状況を見ると、早紀と陽一の目が合った。

「お兄様？少々お話があるのですが」

「分かりました…」

「ではクリスさん。失礼いたします」

「え、ええ」

早紀に引き摺られていく陽一。

その場に残されたのは今起こった出来事に脳がフリーズしているクリスだけだった。

その後早紀と陽一の間になんか起こったかを知る者はほとんどいなかった。

ただ、隣人の話によると『悲鳴が聞こえた』とのことだった。

数日後、寮内の食堂にある掲示板に一枚の紙が貼られた。

それは、学校の開校を示す物であった。

寮内にいた生徒は全部で二百人ほど。

大抵の者は直通でつながっている特別列車や自分の国から船でやってくるものが大半であった。

ここの滑走路は一般旅客機の乗り入れを認めていない。

ハイジャックなどのテロ防止のためである。

また、海から接近する場合にも指定された航路を通らない船は事前通告なしに沈められる。

これはこの場所が開かれたときに世界中のマスメディアを通して発表された事である為、然程被害が出ることは無かった。

もう一つの乗り入れ手段である列車。

列車内には荷物は持ち込めない。

乗客は着の身着のままですべてくるのだ。

荷物は事前に貨物列車を運行させているため特に支障は無い。

もともとここにやってくるのは入学する生徒とここに立地している企業の社員が来る程度の物である。

一応不干渉地域であるため特に問題は起きてはいない。

(ただ、学校の上を占める理事会が出資国から一人ずつ選ばれていてそれが前大戦の戦勝国が大半を占めていることは事実である)

開校する旨を聞いた学生予定者達は皆市内へ買い物に出かけていく。

この人工大地の上にあるのは研究所と寮と学校と企業ビルとコンビニくらいな物であるため買い物ものは列車で陸地のほうへ行かなければならない。

陽一もこの日は出かけていた。

「お兄様、あれが欲しいです」

「早紀、あれは学校に入らないものでしょ」

「クリスは黙っててください」

「後で見てやるから先に学用品を…」

三人で。

何時の間にやらクリスマスと早紀は打ち解けていたらしく、ここ数日は共に遊ぶ機会も幾らかあった。

そんな二人に引つ張られながら陽一は買い物を済ませていくのだった。

「これで揃ったか？」

「ええ」

「はい」

購入した荷物を運搬タクシーに載せるとタクシーは駅へ向かった。

貨物列車に積み替えて自室へ送られるのだ。

「さて…やる事済んだし、飯にするか」

「寮の食堂は閉まっていますか」

「街中で食べるのもお金が掛かるのよね」

大富豪の娘とは思えない発言をしたクリスマスに溜息をつきつつ陽一は案を出した。

「分かった…俺が作るわ」

「本当！？」
ですか

クリスは驚きの目で、早紀は喜びの目で陽一を見た。

「何だよその驚き具合は」

「ハルって料理できたんだ、って…」

「お兄様のお料理…二年振りです」

何がいいかを訊ねた陽一に対する答えは一つだった。

「お兄様のお好きな「寿司！」で」

「分かった。寿司な」

丁度いい形に二人の声が重なった事に思わず笑みを浮かべる陽一だった。

学校が始まったのはこの翌週の事である。

第五話 始まった新たな生活（後書き）

ゆっくり更新

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2662u/>

外伝 僕の身体を捧ぐのは君

2011年11月16日01時51分発行